

自給飼料生産優良事例 No.12

○ごとうがいしゃ合同会社ラックファーム

酪農経営—徳島県徳島市—令和7年11月現地調査

徳島県徳島市の合同会社ラックファームは、乳牛 105 頭を飼養し、借地を主体とした 150 筆、のべ 45ha の圃場で自給飼料生産に取り組む、家族酪農経営である。飼料作のための土地集積が困難である都市近郊農業地帯で、耕作放棄地や遊休地の利用を積極的に進め、高い粗飼料自給率を達成している。自給飼料生産に用いる機械を改良し作業効率を改善するとともに、豊富な自給飼料の活用とアニマルウェルフェアに配慮した飼養管理の徹底によって、高い収益性を実現している。都府県酪農における自給飼料生産の意義とその有用性を実証している経営であり、広く紹介すべき事例である。



1. 概要

合同会社ラックファーム（平成30年に設立）は、徳島県徳島市において、乳牛105頭を飼養し、借地を主体とした150筆、のべ44.6haの圃場で自給飼料生産に取り組む家族協定型の酪農経営であり、令和2年には農場HACCP認証を取得している。

当該地域は耕種中心の都市近郊農業地帯で、飼料作のための土地集積が困難である中、ラックファームは積極的に耕作放棄地や遊休地の利用を進め、夏作トウモロコシ14ha、テフグラス3ha、WCS用イネ2.6ha、冬作イタリアンライグラス17ha、稲ワラ8haを活用し、粗飼料TDN自給率92%を達成している。また、余剰の自給飼料は外部販売を行い、地域の自給飼料として利用されている。さらに、自給飼料生産に用いる機械を改良し作業工程を工夫することで、作業効率の向上と経費の削減を図っている。

牛舎は開放型で、風通しもよく、清掃が徹底している。搾乳牛は、繋ぎ式で乾乳牛と育成牛はフリーバーン牛舎で飼養しており、随所にカウコンフォートを意識した工夫が施されている。豊富な自給飼料の活用とアニマルウェルフェアに配慮した飼養管理の徹底によって、平均産次3.1産、除籍産次5.1産という長命連産の1万kg牛群を健康に飼養する管理体系を築き、経産牛1頭当たりの年間所得199千円の収益を上げている。

ラックファームは、耕種農家の高齢化や新興住宅地の増加による農業環境の制約等、中山間地域とは異なる課題を抱えている都市近郊で、条件不利地も含めた全農地を一括して借地するこ

とで地域の耕作放棄地解消を図っており、畜産による地域の持続性の維持に大きく貢献している。西南暖地の都市近郊農業地帯における自給飼料生産モデルとして、また、都府県酪農における自給飼料生産の意義と有効性を実証したモデルとして、広報に値する事例である。

2. 経営の特徴

合同会社ラックファームは平成30年8月に設立された家族協定型の酪農経営である。水田作と野菜作を主体とする農業生産地帯である徳島市西部地域に所在し、市街地であるにもかかわらず借地により自給飼料生産を拡大し、150筆の圃場群27.6ha（延作付面積44.6ha）を活用して、総頭数105頭の乳牛（うち搾乳牛72頭）を飼養している。

自給飼料生産はトウモロコシ、イタリアンライグラス、WCS用イネの他、暖地型牧草としてテフグラスを導入しているなど、西南暖地の気象条件を活かした多品目の作付体系を展開し、ロールベールサイレージとして利用することで土地利用の効率化を図っている。なお、余剰な自給飼料については、ロールベールサイレージとして販売している。

牛群の管理は、自給飼料中心の飼養体系であるため、飼料給与は分離給与方式である。牛舎は、牛の環境を最優先に考え、日当たりや風通しが良く、細部にまでカウコンフォートを意識した工夫が凝らされている。また、「牛に腹一杯の良質な粗飼料を食べさせたい」との信念のもと、牧草だけでなくトウモロコシも一部を青刈り給与する等、「青草」「長物」に強い拘りを持

って独自の飼養体系を展開しており、その努力が平均産次 3.1 産、除籍産次 5.1 産という長命連産の飼養管理の実現に結実している。

さらに、「整理・整頓・清掃・清潔」を経営理念の一つとして掲げ、牛舎を始めとして、農器具庫に至るまで、非常に清潔で、整頓が徹底しており、作業機械の保守点検や修繕の他、機械の改良等を独自に行うことで、修繕費の削減と作業効率の向上を図っている。

耕種主体の農業地帯において、飼料作面積の集積が困難な条件下で酪農経営を営み、飼料自給率の高い経営を構築している。また、労働力は2世帯4人であり、週1回のヘルパーを利用することで十分な休暇も確保しているなど労働環境についても配慮している。さらに、耕作放棄地解消に向けた畜産経営の貢献を意図し、耕畜連携による地域計画の策定を行政に働きかけ、話し合いを主導するなど、地域づくりの要としての活躍している。

3. 土地利用

飼料作付面積は、のべ 44.6ha でその 95% が借地によるものであり、かつ 150 筆に及ぶ分散化した土地利用条件である（3～10年の借地契約を行っている）。そのため、圃場の緻密な作業計画の策定を行うとともに、管理の効率化を目的として市販営農支援システムを利用している。当該地域は比較的小区画の圃場が多いことに加え、未整備な水田等の境界はコンクリート畦畔が多いため、自己整備による合筆等が困難な状況にあるが、地域の農地保全を意識して、借地においては狭隘な圃場も含めた経営全農地を一括して

借り受けている。

その他、空港敷地内の雑草を資源活用として、地域の和牛繁殖農家と分担して7月と11月の年間2回の乾草調製（約 500 ロール）を行っている。

4. 飼料生産

イタリアンライグラスを10～11月に播種し、年内刈りなどを合わせて4～5月までに4～5回の刈取りを行い、トウモロコシを5～6月上旬播種、8月収穫とする二毛作体系である。イタリアンライグラスおよびトウモロコシサイレージの飼料成分値は良好である。テフグラスは10a未満の圃場に作付けする。サイレージよりも生草の方が牛の「かむ音」が聞こえ、長命・連産に繋がるとの信念を持ち、圃場を傷めないために小型の草刈り機で毎日の青刈り給与を周年実践している（写真1）。



写真1. 小型の草刈り機による
イタリアンライグラスの青刈り作業

その他、空港敷地内の雑草8haを年2回収穫して一部育成牛用の乾草や敷料としている。イタリアンライグラスはすべて自家で利用するが、イネWSCや稲ワラは全て販売する。トウモロコシサイレージも一部販売している。販売先は主に隣県の飼料会社である。

またトラクターを9台所有し、様々な作業機を改良して作業効率を向上させている。パワーハローへの播種機の取り付けや、鎮圧ローラーに殺菌剤用ホッパーを取り付けてテフグラス用の播種機改造、ホームワゴン改造によるトウモロコシサイレージ調製(写真2)などにより、将来的な労力不足も想定して、効率的に作業を進めている。現在、トウモロコシサイレージ調製作業時に数名の運搬員を雇用する以外は家族だけで圃場作業を行っている。



写真2. トウモロコシサイレージ調製風景

5. 草地管理

草地はイタリアンライグラスとテフグラスの2種類である。除草剤も使用しており、雑草は少ない。施肥は、堆肥(ふん尿)のみであり、土壌分析値をみると、カリが多く、カルシウムが不足している傾向があるため、引き続

き土壌分析を継続して対応することが望ましい。

6. 飼養管理

搾乳牛72頭を含む105頭を飼養している。飼養管理は繋ぎ式牛舎とフリーバーン牛舎の組み合わせで行っている。牛舎はいずれも開放牛舎で、風通しもよく、清掃が徹底されている(写真3)。カウコンフォートを重視しており、搾乳牛は繋ぎ式牛舎で、ストール幅を135cmと広くし、飼槽を牛床よりも10cm上げて採食しやすくするなどの工夫を行っている(写真4)。乾乳牛と育成牛はフリーバーン牛舎で飼養している。通常の高泌乳牛に多く見られる肢蹄病も少ない。また、子牛には、チモシー乾草が豊富に給与され、稲ワラや空港雑草が敷料として潤沢に使われている。



写真3. 風通しの良い畜舎



写真4. 生草を給与されている搾乳牛

経産牛1頭当たりの乳量は9,894kg、平均乳脂率3.75%、SNF率8.81%と良好な成績であり、年間淘汰率が低く平均産次3.1産、除籍産次5.1産という長命連産を達成している。一方、繁殖成績は平均分娩間隔15.3ヶ月とやや長く、平均体細胞数も368千個/mlと高めである。

夏季の暑熱対策は、牛舎内では大型扇風機、牛舎外では、6月後半～9月後半に8:00～17:00に屋根上散水による対応が行われている。

畜舎作業は、飼料給与は本人と後継者、哺育育成は後継者の妻、搾乳は妻と責任分担が明確化されており、作業自体は協力して実施している。

7. 放牧管理

該当なし。

8. ぶん尿処理

ラックファームは堆肥舎を設置しているものの、近隣住民からの堆肥臭に対するクレームがあり、十分な活用ができていない状況にある。このため、現在は圃場へのすき込みを主として、一部、購入堆肥による対応を行っているが、今後は、各種臭気対策を検討したうえで、良質な堆肥作りに努め、これを有用な資材として活用していくことが望まれる。

9. 地域との連携と普及性

ラックファームは、担い手不足もあり耕作放棄地が増えている都市近郊農業地帯において多くの農地を引き受けている畜産農家として、地域の農地保全に対する貢献度が高い。今後は、さらなる地域農業の活性化を目指して、耕種農家だけでなく、地域住民、行政等との協力関係の構築をさらに深めていくものと期待される。

都市近郊の収益性の高い酪農経営モデルとしてだけでなく、都府県酪農における自給飼料生産の意義とその有用性を実証している経営である。

以上